

令和4年11月伊勢原市教育委員会定例会会議 日程表

日時：令和4年11月22日（火）

午前9時30分から

場所：市役所 3階 第2委員会室

開 会

議 事

日程第1 前回議事録の承認

日程第2 教育長報告

日程第3 教育委員報告

その他

閉 会

令和4年度 全国学力・学習状況調査の伊勢原市結果の分析について

伊勢原市教育委員会

伊勢原市では、児童生徒の学力や学習状況に関し、継続的な検証改善サイクルの確立を目的として、文部科学省「令和4年度 全国学力・学習状況調査」を実施しました。

伊勢原市立小中学校の調査結果の概要をお知らせします。

【調査日時】 令和4年4月19日(火)

【調査対象学年・参加人数】 小学校6年生 733人 中学校3年生 728人

【調査内容】

1 教科に関する調査

- ・小学校:国語、算数、理科 中学校:国語、数学、理科
- ・出題範囲:調査する学年の前学年まで
- ・出題内容:「知識・技能」及び「活用」に関する問題を一体的に出題
- ・出題形式:記述式の問題を一定割合で導入

2 児童生徒に対する質問紙調査、学校に対する質問紙調査

【調査結果についての留意事項】

- 実施教科が国語、算数・数学、理科の3教科であり、学習指導要領のすべてを網羅するものではないことから、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であること。
- 年度によって問題の質が異なるため、平均正答率の経年変化のみから、学力の向上、低下の傾向を評価することは難しいこと。

1 教科に関する調査の結果から

(1)平均正答率

小中学校共に、全国及び神奈川県と比較して、正答数・正答率と大きな差は見られませんでした。

《令和4年度 教科に関する調査の平均正答数と平均正答率(%) (公立小中学校)》

令和4年度	小学校						中学校					
	国語		算数		理科		国語		数学		理科	
	(14問)		(16問)		(17問)		(14問)		(14問)		(21問)	
	正答数 (問)	正答率 (%)	正答数 (問)	正答率 (%)	正答数 (問)	正答率 (%)	正答数 (問)	正答率 (%)	正答数 (問)	正答率 (%)	正答数 (問)	正答率 (%)
伊勢原市	8.9	64	10.1	63	11.0	65	9.7	69	7.2	51	10.8	51
神奈川県	9.1	65	10.2	64	10.8	63	9.7	69	7.4	53	10.5	50
全国	9.2	65.6	10.1	63.2	10.8	63.3	9.7	69.0	7.2	51.4	10.4	49.3

※県及び市の平均正答率は、国から小数第1位を四捨五入した整数値で提供されています。

(2)教科・設問ごとの分析結果

教科に関する調査結果について、各教科・設問ごとに分析したところ、習得の状況が良好であると見られる特長と指導の改善・充実が求められる課題が見られました。

～主な特長と課題～

小 学 校	国 語	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・話し言葉と書き言葉の違いを理解している。 ・必要なことを質問し、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの内容を捉えることができる。 ・登場人物の相互関係について、描写を基に捉えることができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うこと。 ・文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えること。 ・文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。
	算 数	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・被乗数に空位のある整数の乗法の計算をすることができる。 ・図形を構成する要素に着目して、長方形の意味や性質、構成の仕方について理解している。 ・正三角形の意味や性質を基に、回転の大きさとしての角の大きさに着目し、正三角形の構成の仕方について考察し、記述できる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の場面に即して、数量が変わっても、割合は変わらない場合があることを理解すること。 ・示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を考察すること。 ・伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、未知の数量の求め方と答えを記述すること。
	理 科	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・問題に対するまとめを導き出すことができるように、実験の過程や得られた結果を適切に記録している。 ・自然の事物から見いだした問題を解決するまでの道筋を構想し、自分の考えをもつことができる。 ・提示された情報を、複数の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・日光は直進することについて理解すること。 ・水は水蒸気になって空気中に含まれていることを理解すること。 ・自然の事物・現象から得た情報や実験で得た結果を、他者の気付きや問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述すること。

中学校	国語	特長	<ul style="list-style-type: none"> ・文脈に即して漢字を正しく書くことができる。 ・事象や行為、心情を表す語句について理解している。 ・聞き手の興味・関心などを考慮して、表現を工夫している。 ・場面と場面、場面と描写などを結び付けて、内容を解釈している。
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・表現の技法について理解すること。 ・行書の特徴を理解すること。 ・自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫して話すこと。 ・自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くこと。
	数学	特長	<ul style="list-style-type: none"> ・命題や推測した事柄について考察する場面において、反例の意味を理解している。 ・多数の観察や多数回の試行によって得られる確率の意味を理解している。 ・目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができる。
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・自然数を素数の積で表すこと。 ・箱ひげ図から分布の特徴を読み取ること。 ・筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明すること。
	理科	特長	<ul style="list-style-type: none"> ・観測地の標高を空間的に捉え、気圧の概念を空気の柱と関連付けて説明することができる。 ・モデルを使った実験において、変える条件と変えない条件を制御した実験を計画することができる。 ・節足動物の外部形態の観察結果と調べた内容を、生活場所や移動の仕方と関連付けて、体のつくりと働きを分析して解釈することができる。
		課題	<ul style="list-style-type: none"> ・力の働きに関する知識及び技能を活用して、物体に働く重力とつり合う力を矢印で表し、その力を説明すること。 ・露頭の観察において、岩石に関する知識及び技能を活用すること。 ・身近な事象について、化学変化に関する知識及び技能と「エネルギー」を柱とする領域の知識及び技能を関連付けて分析し、解釈すること。

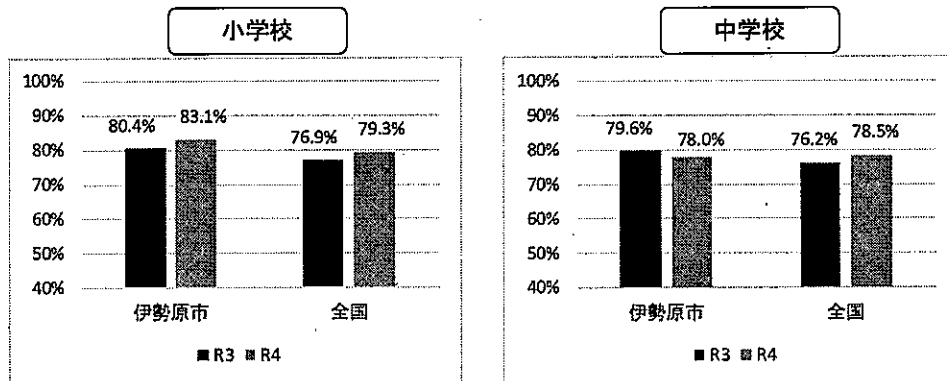
2 児童生徒質問紙調査の結果から

* 各グラフの数値は、質問に対して「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した児童生徒の割合を示しています。

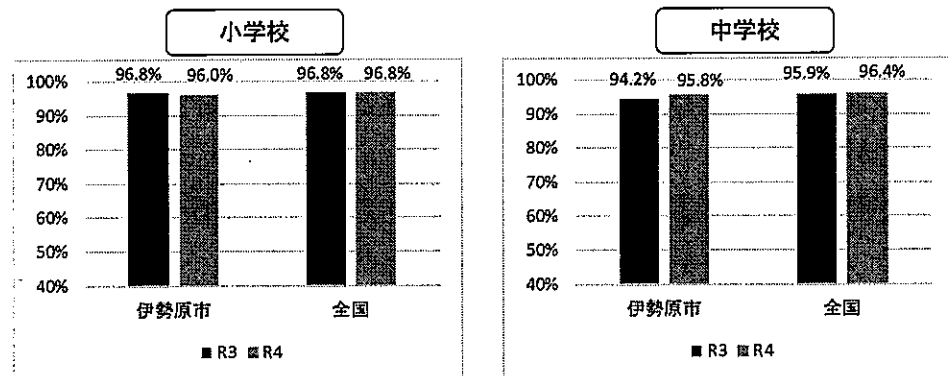
(1) 児童生徒の生活に対する意識に関して

- ・自分にはよいところがあると感じている児童の割合は、全国平均を上回っています。また、中学校において、肯定的な回答については全国と同程度ですが、「当てはまる」と回答した割合が高くなっています。引き続き、各校での教育活動や道徳教育など、さまざまな場面で、一人ひとりの適切な評価に努め、よいところは積極的に褒める等、個に応じた指導に留意する必要があると考えられます。
- ・「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」と回答している児童生徒の割合は、引き続き高い状態です。今後もより一層、児童生徒の意識を高めていく必要があります。

Q「自分には、よいところがあると思いますか」



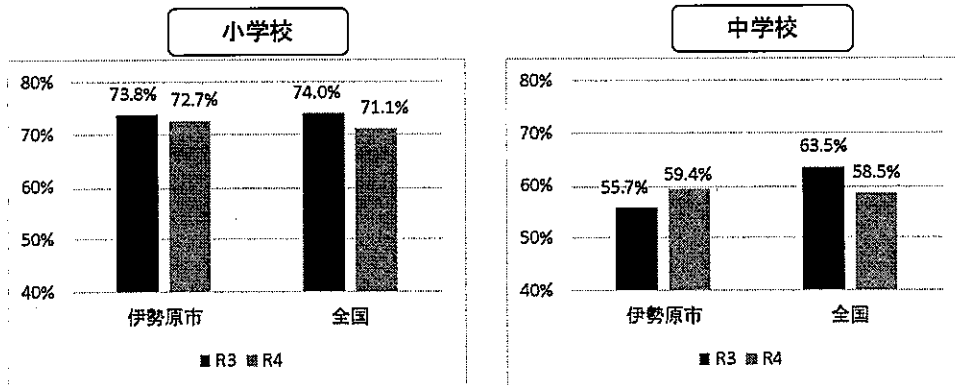
Q「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」



(2) 家庭学習に関して

- ・小学校では昨年同様に全国と比較して大きな差はみられませんが、中学校では自分で計画を立てて勉強をする割合に増加傾向が見られます。
- ・主体的に学習に取り組めるように、学習課題を明確にするとともに、勉強の仕方を指導することが必要です。学校と家庭とが連携をして、学校の学びを家庭へつなげることも大切です。

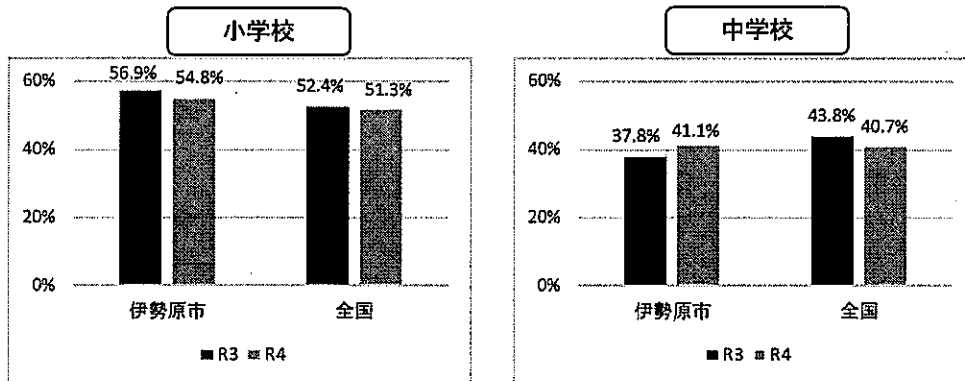
Q「家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか(学校の授業の予習や復習を含む)」



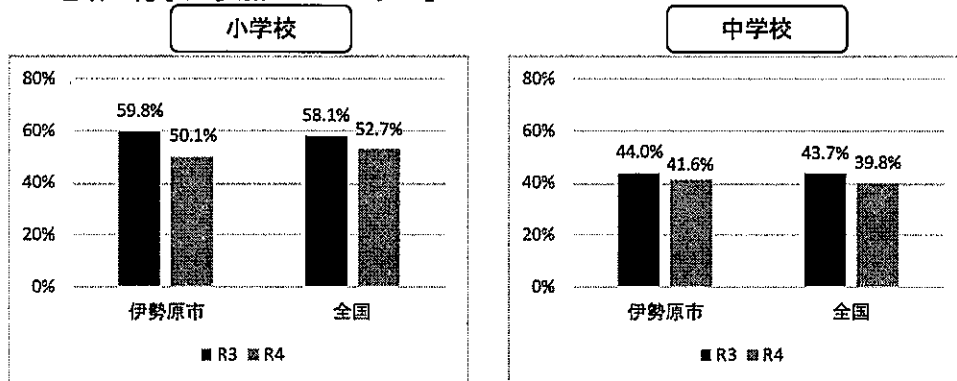
(3) 地域や社会に関わる活動等の状況について

- ・地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある児童生徒の割合は、全国と比較して若干高めです。また、今住んでいる地域の行事に参加する児童生徒の割合は、昨年度と比較して下がっていますが、全国と比較して大きな差はありません。
- ・今後も地域の魅力や、地域のよさを生かした学習活動に取り組むとともに、地域とともに子どもを育てていく必要があります。

Q「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」



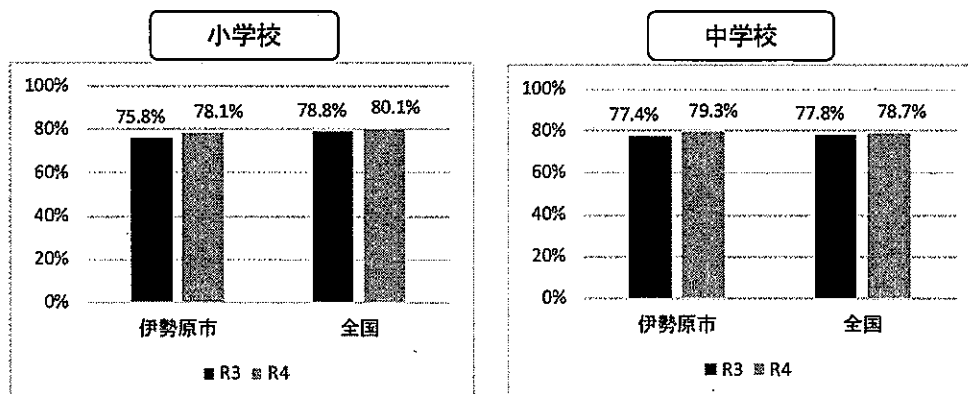
Q「今住んでいる地域の行事に参加していますか」



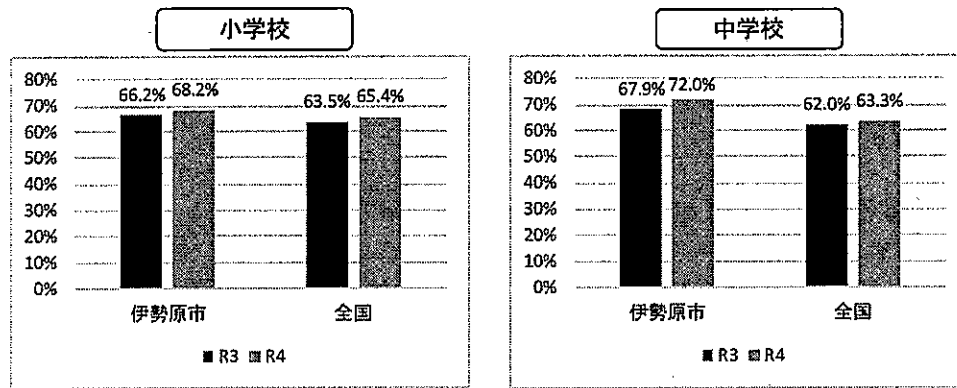
(4) 主体的・対話的で深い学びの視点から

- ・「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」と感じている割合は、小・中学校ともに、全国と比較して大きな差はありません。「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している」と感じている割合は、小・中学校ともに、全国と比較して上回っています。「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と感じている割合においても、全国と比較して差はありません。
- ・引き続き、話し合う活動や自分の考えを発表する学習をさらに充実させていくことが必要です。また、思考力・判断力・表現力等の基盤となる言語能力の育成に当たって、児童生徒の発達段階に応じた問いを設定するなど、指導を工夫していくことが重要です。さらに、課題設定の工夫や言語活動の充実等を通して、児童生徒が主体的に学ぶ意欲を引き続き高めていく必要があります。

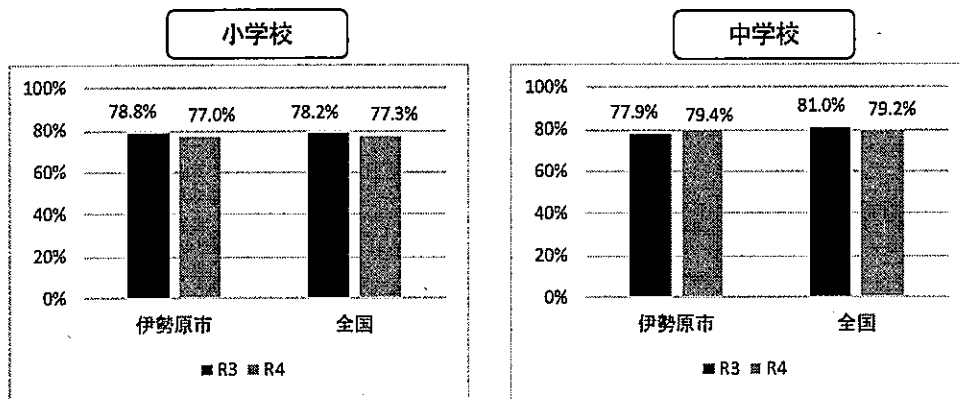
Q「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」



Q「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか」



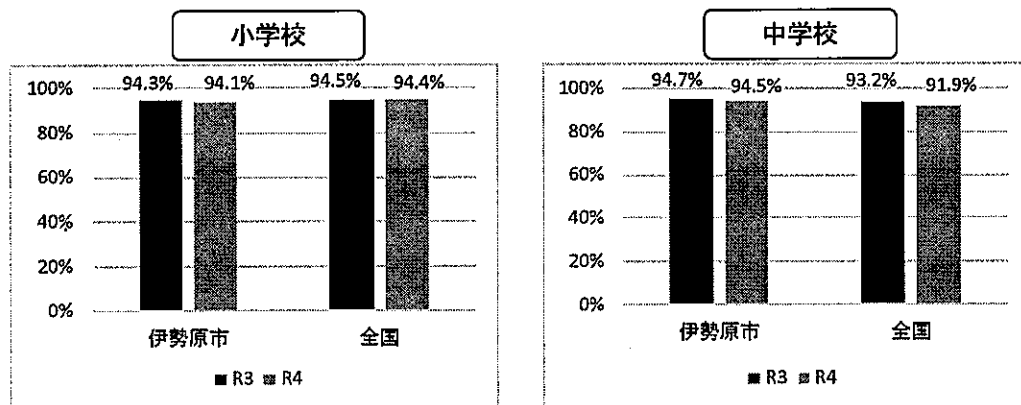
Q「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」



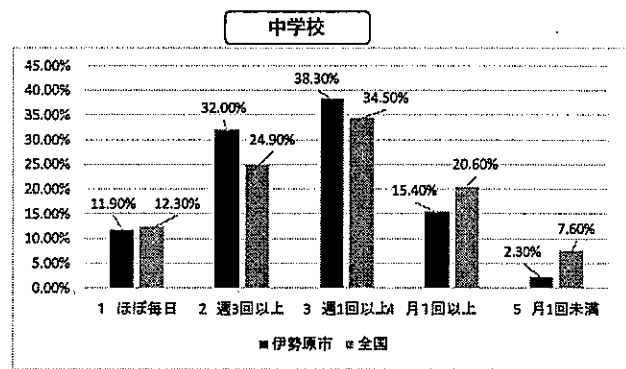
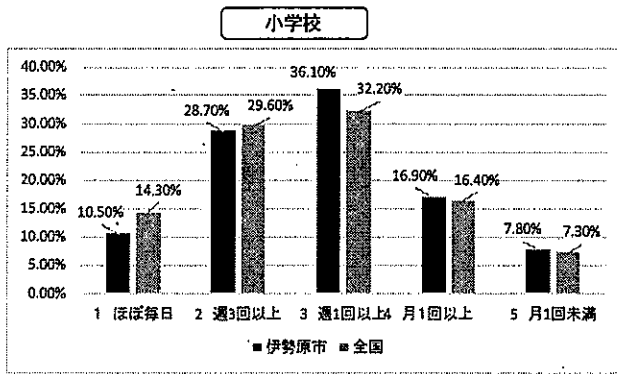
(5)ICTを活用した学習状況（新規）

- ・「学校の中で PC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う」と回答している割合は、9割を超えています。
- ・各場面におけるPC・タブレットの利用の程度は、小学校においては全国と比較して割合として低めです。一方、中学校においては全国と比較して高めになっています。
- ・調べたり、意見を交換したり、発表したりといった学習におけるそれぞれの場面で、ICT 機器を効果的に活用しながら学習をすすめることで、児童生徒の資質能力を育む必要があります。

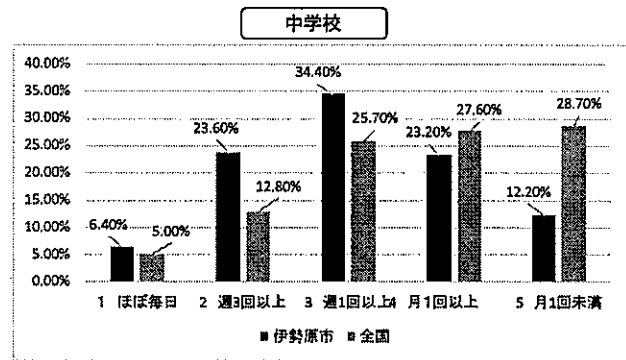
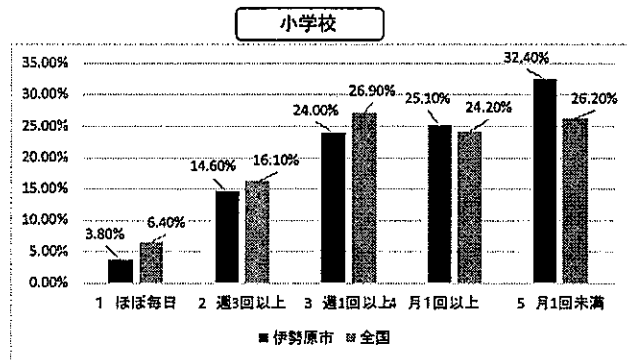
Q「学校の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか」



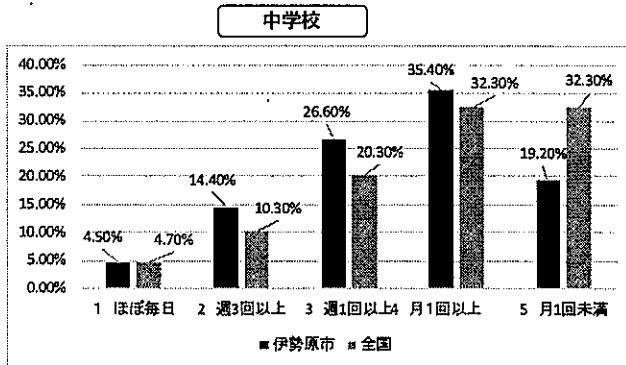
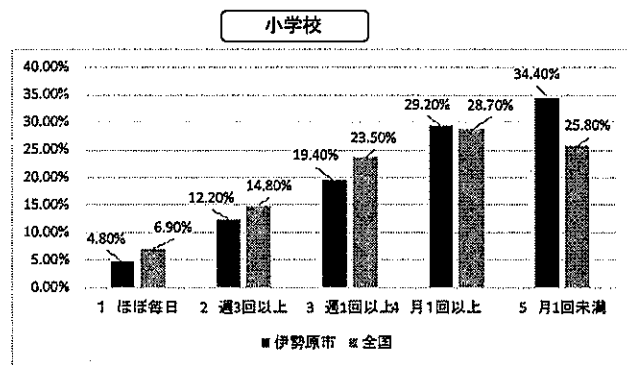
Q「学校で、授業中に調べる場面で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っていますか(インターネット検索など)」(新設)



Q「学校で、学級の友達と意見を交換する場面で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っていますか」(新設)



Q「自分の考えをまとめ、発表する場面で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使っていますか」(新設)



3 児童生徒質問紙調査と教科に関する調査のクロス集計結果から

児童生徒質問紙調査の結果と教科に関する調査結果との関係を見ると、次のような児童生徒の方が、教科の正答率が高い傾向が見られました。

- ・朝食を毎日食べている。
- ・毎日、同じくらいの時刻に寝ている。
- ・携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っている。(小学校)
- ・自分には、よいところがあると思う。
- ・自分でやると決めたことは、やり遂げる。
- ・家で自分で計画を立てて勉強をしている。(学校の授業の予習や復習を含む)
- ・読書は好き。
- ・今住んでいる地域の行事に参加している。(小学校)
- ・地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある。(小学校)
- ・自分と違う意見について考えるのは楽しい。
- ・授業で自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していた。
- ・授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。
- ・授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめたり、思いや考えをもとに新しいものを作り出したりする活動を行っていた。
- ・話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。
- ・学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている。

4 学校がよりよい授業実践に向けて重視していきたいこと

各学校では、次のような点を重視し、全学年・全教科を通じて授業の充実を図る必要があります。

- ・習得した知識及び技能を活用して、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力をはぐくむため、各教科等の授業において引き続き、課題の解決に向けた取り組みを充実すること。
- ・学校全体の言語活動の実施状況や課題について全職員で話し合うなど、学校全体としての取組を継続すること。
- ・全国学力・学習状況調査の結果を分析し、学校全体の教育活動の改善に生かすとともに、引き続き、保護者や地域の方との協力・連携を進めること。
- ・大型提示装置や1人1台端末などのICT機器の利点を生かした授業を行うこと。
- ・家庭との連携を図りながら、発達の段階に応じて、家庭での学習課題を適切に与えたり、学習計画の立て方や学び方を、具体例を挙げながら指導したりするように、教職員で共通理解を図ること。

【小学校国語】

- ・学習活動や日常生活において文や文章を書く際、必要に応じて漢字を使う意識がもてるように指導する。
- ・文章全体の構成や表現等について読み手を意識しながら文章を読み返し、児童自身が推敲の必要性を感じながらよりよい文章を書くことができるよう指導する。
- ・互いの文章を読み合う経験を積み重ねるため、互いの文章のよさや感想について具体的に伝え合う機会を設けるよう意識する。

【小学校算数】

- ・児童の考えに寄り添いながら、正しく判断するためにはどの方法で概数にして計算するとよいかという問題に焦点化できるようにする。
- ・一方の数を大きくみてもう一方の数を小さくみる概算は、実際の数の積より結果が大きくなる場合と小さくなる場合があるが、両方の数を小さくみる概算は、実際の数の積より結果が必ず小さくなることについて、図を用いて、筋道を立てて考え、結論付けることができるようにする。
- ・割合として表される数量に関わる生活経験を豊かにし、「日常の具体的な場面」、「図や表」、「数や式」を相互に関連付けて、割合について理解できるようにする。また、割合を用いる際、比例の関係を前提にしていることを理解できるようにする。

【小学校理科】

- ・主体的な問題解決を通して生きて働く知識を習得し、知識を概念的に理解できるようにするとともに、習得した知識を次の学習や生活に生かすことができるよう、実際の自然の事物・現象と関連付けて、科学的な言葉を使って説明できるようにする。
- ・自然の事物・現象に働きかけて得た事実について、児童同士の話し合いの中で、比較の考え方を働かせながら、自分や他者の気づきを基に、差異点や共通点を捉え、新たな問題を見いだしていく場面を設定する。
- ・記述式問題の無解答が多い傾向にあることから、普段から、具体的な数値等の結果を用いて自分の考えを表現することを意識させるとともに、結論の根拠を記述することが難しい場合には、根拠の記述例を示してより適切なものを選んで記述するようにするなど、段階的に指導をする。

【中学校国語】

- ・様々な表現技法を、その意味や用法と結び付けて理解し、話や文章の中で使うことができるように指導する。
- ・同じ文字を楷書で書いたものと行書で書いたものとの比較する等、これまでの学習と関連付けることを意識して指導する。
- ・聞き手の興味・関心、情報量などを考慮しながら話す内容や話し方を検討したり、なぜそのように表現を工夫したのか、その意図を明確にして工夫したことの効果を確かめたりする場面を設定することを意識する。
- ・資料から必要な部分を引用して自分の考えを伝える文章を書き互いに読み合うなどの学習活動を行うなど、根拠を文章の中に記述する必要があることを理解して書くことができるよう指導する。

【中学校数学】

- ・自然数を素因数分解することを通して、整数に対する見方をさらに広げ、小学校算数科で学んだ約数や倍数の性質についての理解をさらに深めることができるようにする。
- ・必要なデータを収集して処理し、データの分布の傾向を捉え、その結果を基に批判的に考察し判断するという一連の活動を充実させ、統計的に問題解決することができるように指導を工夫する。
- ・図形の性質を考察する場面では、観察や操作、実験などの活動を通して、予想した事柄が成り立つ理由を、筋道を立てて考えることができるようにするとともに、条件を変えても予想した事柄が成り立つか確かめたり、予想した事柄が成り立つための条件を見いだしたりするなど、統合的・発展的に考察できるようにする。

【中学校理科】

- ・理科を学ぶことの意義や有用性の実感を高めるため、見いだした規則性や関係性を、日常生活や社会と関連付けて探究する学習場面を繰り返し設定する。
- ・科学的に探究する活動を充実させるため、根拠として用いた観測データが自然の事物・現象と対応しているか、観測データの読み取りが適切であるか等の視点を明示して、自分や他者の考察の根拠が妥当かどうかを、多面的、総合的に検討して改善するよう指導する。
- ・記述式問題の無解答が多い傾向にあることから、普段から、全ての領域において、実験や観察の結果から得られた「根拠となるもの」を踏まえた上で、課題を意識して「考えたことや判断したこと」を記述するよう指導する。

5 家庭にお願いしたいこと

進んで学ぶ子どもを育てるために、家庭においても特に次の点について、ご指導をお願いします。

- ・ 規則正しい生活習慣を心がけましょう。
例) 早寝・早起き・朝ごはん、家庭学習や読書等の習慣 等
- ・ 家族で、学校や地域、社会での出来事、将来のことなどについて話題にしてみましょう。
- ・ 日常生活の中での「達成感」を大切にしましょう。
例) 家庭の中で子どもに役割を与えましょう。子どものがんばりをほめましょう。
- ・ ボランティア活動や地域の行事等に一緒に参加しましょう。
例) 市民総ぐるみ大清掃、公民館まつり、総合防災訓練、地区・学区体育祭などへの参加 等
- ・ テレビゲームや携帯電話・スマートフォン等の使い方について、話し合しましょう。
「スマートフォンの使い方 フォン当に大丈夫? ~STOP!! 1タップ~」
(令和3年度伊勢原市中学生からのスローガン)



伊勢原市教育委員会では、家庭学習の手引きとして、冊子『学びのすすめ』を作成し、学校を通じて家庭に配布しています。ぜひご活用ください。

参考 冊子『学びのすすめ』は、伊勢原市教育センターのウェブサイト内リンクリストからダウンロードできます。伊勢原市教育センターURL <http://www.isehara.ed.jp/center/>

令和4年度

神奈川県市町村教育委員会連合会研修会

- 1 日時 令和4年11月18日(金) 14:00～16:00
- 2 場所 茅ヶ崎市民文化会館 小ホール
茅ヶ崎市茅ヶ崎1-11-1
- 3 日程 13:30～14:00 受付
14:00～14:10 開会、挨拶
(茅ヶ崎市教育長職務代理者、茅ヶ崎市教育長)
14:10～15:55 講演、質疑応答
15:55～16:00 閉会(葉山町教育長職務代理者)
- 4 講師 國學院大學・佐賀大学名誉教授
國學院大學法人参与・法人特別参事
新富 康央 氏
- 5 演題 『「支持待ち世代」の教育の在り方～「損在」を「尊在」に～』

序 日本の学校教育は何故、「エクセレント！(秀逸)」なのか？

「(資質・能力で) できる子」だけでなく、「(人間的に) できた子」の育成も

↳ PISA型学力(生涯学習型)もTIMSS型学力(数学、理科のドリル型)も

↓

「汎用性能力の育成」「主体的、対話的で深い学び」(今次「学習指導要領改訂」)

◎ 日本の学校教育制度の起源から見る「できる子」育成指針

	日本	対	欧米
学校の起源・・・人育ての「 <u>神社学校</u> 」		対	読み書き塾の「 <u>サーカス</u> 」(巡業興行)
「教育」の原点・・・古事記「 <u>修理固成</u> 」		対	「EDUCATION」
	「(自ら)なる」教育	対	「(外から)つくる」教育
	「(しつけ)」「(紡ぐ)」「(育む)」「(啐啄同時)」		
教師の性格・・・「 <u>聖職</u> 」(神職の延長)		対	「 <u>スクール・マスター</u> 」(団長=校長)
教育権	「 <u>国権</u> 」(国の責任)	対	「 <u>親権</u> 」(保護者の責任)

- 我が国の教育は、狭い「教育」を超えた人間力育成を視野に入れた広義の「教育」→「人づくり」の日本の教育

↓

参考添付資料:AERA「人間開発」

- ◎ 世界で唯一、「特別活動」&「道徳」や「生徒指導」を学校教育の範疇に
(望ましい集団活動) (心の耕し)

「支持待ち世代」への対応 ～「損在」を「尊在」へと高める2本柱、方策(2)&(3)～

(1) 子どもたちは、今 ～「支持待ち」の子ども達～

- 「自分への自信の喪失」、「閉じた個」 (自己存在感が、「(自己)損在」感に)
『平成19年版中央教育審議会答申』

- 「(自分は)その他、お客さん、おまけ、ふろく」(「七五三の教育」)
S市内中学2年生1000人調査より

参考添付資料:「届け!いじめのSOS」

- 「誰からも必要とされていないという貧しさこそ、一切れのパンの飢えよりも、
もっとひどい貧しさと言えます」 (マザー・テレサ 日本の子どもへのメッセージ)

(2) 方策1:一人一人の「重さ(自尊感情、自己存在感、自己有用感)」を保障する仕組み

- 「握手作戦」 「腕相撲大作戦」 「11人の綱引き」 「友膳(陰膳)」
「スキンシップ大作戦」 「アーモンドチョコ班から金平糖班へ」

「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ」

「二人三役」(「一人一(多)役」は基本)

○ 「ピグマリオン(期待影響)効果」

「みんなに愛されている みんなに信じられている みんなの役に立っている
という自信が、あの絵を描かせたのです」(ねむの木学園長・宮城まり子)
信頼と期待のエール(声かけ)を! (まずは「挨拶」運動)

○ 「全員野球」「ニコニコ野球」(池田高校・蔦野球)

「自分は大切な人間である。そして、他人もまた、大切な人間である」
(「さわやかイレブン」) (全員交換ポジション制)



◎ 「豆腐づくりの教育から、納豆づくりの教育へ」

参考添付資料:「真の個性重視とは」

(3) 方策2: 心の「手当て(手を当てる)」をする

○ 「見つめる目」を持つ(人づくりの「3つの目」)

見つめる目 → (よさを) 見つける目 → 見まもる目・・・子育て「3つの目」
(受容) (支援) (自律)

(反射の技法) (明確化の技法) (支持の技法)・・・カウンセリングの技法

「そ〇〇ね」 → 「〇〇だから〇〇なんだ」 → 「でもね、今は〇〇だから」
「これではいけないと思っているんだ。スゴイ」



「ソ〇〇ネ方式」、「コソフの原理」&「ハンバーガー方式」



○ 「出会いとは、空(くう)なり」

○ 子どもを「救う目」で、「ねうちづくり(評価)」(カタツムリ拍手)

「ナメクジは 殻持たぬゆえ 疎(うと)まれる」

教師・大人の見方一つで、子どもはナメクジにもカタツムリにもなる

◎ 「カウンセリング・マインド」の生徒指導を

「この子は あざみの花を 胸いっぱいにだいて来て

教室の花びんに させという あざみのとげの チクチクと痛いだろうに

この子は 花きれいなね 花きれいなねと あざみの花を 花びんにさす

野の花の心がわかるのか この子 (田代一茂『小さなほとけたちの涙』)

結語 今こそ、「ジャガイモの心」を

「はきだめにえんど豆咲き、泥地から蓮の花が育つ、人皆に美しき種子あり、

明日何が咲くか」

(安積得也『一人のために』詩集より、「明日」)

“人づくりのプロ”育成へ 人間開発で教育が変わる

新富 康央

1948年広島県生まれ。佐賀大文化教育学部教授、同大副学長、東京理科大学大学院学長等を歴任。2007年8月に國學院大学人間開発学部設置委員長就任。文部科学省の学習指導要領改訂協力者会議委員等も務める。専門は教育社会学。

科学的なアプローチで 個々の可能性を“開発”

社会の急激な変化を受け、教育のあり方が改めて問われている。指導者に求められるのは「科学的な視点(科学する眼)」と「実践力」。126年の歴史と伝統を誇る國學院大学に、創設以来初となる新学部「人間開発学部」が誕生する予定である(2009年4月設置認可申請中)。目指す先は、真の指導者育成。人間開発という新たな視点の導入で、教育はどう変わるのか。國學院大学人間開発学部設置委員長・新富康央教授が、新学部設置の経緯と構想を語ってくれた。

潜在能力に目を向ける

来々4月、國學院大学に「人間開発学部」が開設される予定。学部内には初等教育学科、健康教育学科の2つの学科を設置。人間開発を担う真の指導者育成を目指すという。

とにある。日本では、表面的な能力や才能ばかり評価される傾向があります。が、表面だけでは個人の資質・才能は測れません。個人の潜在能力を見極め、広げ、醸成させる。指導者の能力が不可欠であると考えています」

人間開発の先に教育がある

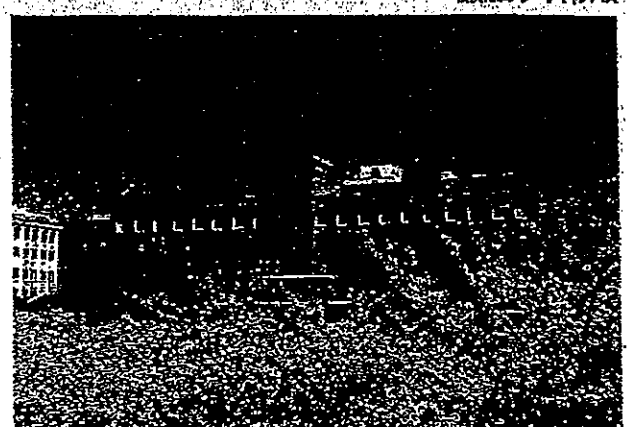
國學院大学といえは、教職の國學院の名で知られる。教員育成の名門校である。なぜ今あえて、教育系学部を新設するのか。その理由について、人間開発学部設置委員長・新富康央教授は「昨今、浮き彫りになってきている、人づくりの諸問題に対応していくには、既存の教育では限界がある」と説明する。「社会の急激な変化に伴い、夢や希望、自信を持ってない。損な感を抱える子どもたちが増えています。問題は、教育が狭い枠で泥えられ続けてきたこ

一般的な教育学部の多くが教育技術の指導を中心に据えているのに対し、「人間開発学部」では、少人数制・体験重視型のカリキュラムによる、実践的な能力開発を重視している。また、これまで勤や経験に頼りがちだった教育技術を科学的に分析。「人はどうあるべきか」という当為の科学と、人間はどのように発達するか、という発達学を橋渡しする(新富教授)。「人間

開発学の確立」を目指す全国で類のない学部としても注目されている。「教育とは本来、広く諸能力を開花させる科学であり、人間開発の延長線上にあるべきもの。「人づくりのプロ」育成を目標とする本学部では、入学される学生の能力を開発していくことも、重要な目的のひとつです。やってみてみたい」という子どもを肩を押し、できる。にまで気持ちを開放してあげること。教育現場には様々なドラマがあります。教員という仕事の一番の魅力は、人が変わる瞬間のドラマに立ち会えることかもしれません」



新富康央(左)と新富康央(右)



文/新富康央 写真/藤原(人物) デザイン/川上 博士 (川上博士事務所) 企画・制作/AERA AD セクション

未来に 教育ドクター

しんぞみ・やすひさ 一九四八年、広島県生まれ。広島大学大学院修了後、佐賀大学文化教育学部教授を経て同大副学長。二〇〇四年三月末に副学長を退任。同四月から同大で再び教授に立っている。文部科学省の学習指導要領改善協力委員会議員などを務めている。専門は教育社会学。著書は多数。

「いじめ」はなぜ起こるのか。いじめに関するテレビのコメントや政府の教育再生会議委員の意見を聞いてみると、その思わぬを得ない。彼らの主張は、加害者側の親であるというの強化、出席停止を伴う厳しい措置、欧米のいじめ対策マニュアルの活用などである。現在、起きている深刻ないじめとは、どうか違うのだろうか。



佐賀大学教授 新富 康央

議論を展開する。いじめの原因で学校に行かなくなったり、いじめを拒否する者や、問題を真に向かい取り組んでいく現場教師は決して

「いじめ」として「日本型」といって言葉を使いたくない。現在、日本の学校現場で起きているいじめは「昔も似た」とか、「欧米にも似た」といって、いじめ、異

第一、日本型いじめは、何をもって「いじめ」というのか特定し難い。単なる暴力でも、物取りでもない。からから、悪あがき、けんか、無視、物陰しなどの境界線がない。これら具体的な事柄の「いじめ」が、いじめではない。これを集団総体として行っているが、日本型いじめなのである。加害者も一人一人は、それが悪あがきだからと思えて「いじめ」とは思っていない。そのため教育指導が困難である。

届け！ いじめのSOS

第二の特徴は「同じ仲間だからいじめ」である。昔のいじめとは、これが根本的だった。昔のいじめは、自分たちの外の集団に対し、外向きに行われた。だが、日本型いじめは、同じクラスや同じ部活などで内向きに行われる。同じ仲間だからいじめ。この意味で欧米では理解できなところ。日本型いじめの被害者は、いじめも受け場がないのだ。

第三は、集団の全員が加害者であるという点。昔のいじめは欧米のいじめはA対Bといった明確な対立図はあった。ただ、集団の区別が行われる日本型いじめは、被害者として傍観者(見て見ぬふりの人)も含めて、全員が加害者なのだ。また、それを知っているから傍観者も傷つく。また被害者は仕返しを恐るといういじめを訴えられない。

第四に、日本型いじめの原因は、三冠馬ファインパクトになることを強要された子どもたちのイヤミと不安、つまり自尊感情の喪失であるといえた。加害者の手にも対する心の手当てが必要である特徴である。

シンポジウムを開催した際、反省をせられたことがある。不登校生徒を持つ親の会のお母さんが立ち上がり、訴えてくれた。「私たちが望むのは、わが子がいじめ対策はありませぬ。私の子もいじめで苦しんで遭った、学校に行けなくなりました。その子が言いました。『私が死ななかつたのは、お母さんが私の話を聞いてくれたからだ』と。先生も、話を聞いてくれたらいいのだ。」

いじめは日本の社会がいつの日も出た子どもの悲劇。子どもたちのSOSの声を聞きながら、困窮する社会に向けて手を回さなければ。

西日本新聞
2003-7-3

未来に 個性重視

個性重視のぶどりの教育、生きる力、総合学習……。これからの教育のカギとなる用語が、職場や茶の間で話題に上るようになった。

しかし、言葉の吟味はあまりなされず、その結果、教育界に混乱が起きている。きちんと言葉の意味を整理しておく必要がある。今回は「個性重視」という言葉について考えてみたい。

先生は、小学校の年生の学級担任。毎日のように遅刻する子どもの親に電話で注意をした。だが、親は、先生に怒鳴り返した。「遅刻するのは、子どもの

新富 康央 佐賀大副学長

個性の問題。放っておいてくれ」
先生は、答えた。



真の「個性重視」とは

「だしかに、遅刻は個性の問題かもしれませんが。しかし、学校で教えるのは、個性だけではありません」

数年前、アメリカに留学中、ある教授に指摘された。「日本人が言っている個性とは、単に自己表現の

の学校をスローガンにされているのだ」
個性を多様性(他との違い)と見る日本の個性観。それは、同質性(みんな一緒に)に価値を置いてきた日本の文化への反動から生まれたものかもしれない。

個性重視の教育が、日本の学校教育の伝統とも考えられるその教育「からの

「一人一人が個性の輝きを求めれば、その結果、当然それぞれに多様性が生まれ、個性重視」とは、結果生まれた多様性を、互いに受け入れるということなのである。そして、初めに多様性という個性の追求があるのではない。

なく、真は主在性の問題なのである。つまり、個性とは、他の誰をも替えることのできなない自分の「存在」に向かつて、「一生懸命がんばる」といえるのである。

「個性重視」が、全米中

「個性重視」が、全米中

「個性重視」が、全米中

「個性重視」が、全米中

「個性重視」が、全米中

「個性重視」が、全米中

「個性重視」が、全米中

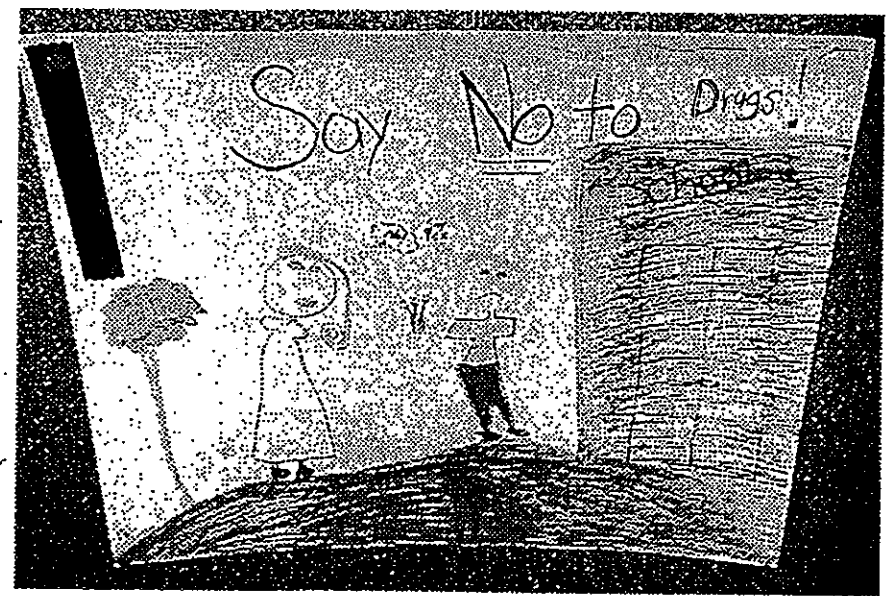
「個性重視」が、全米中

「個性重視」が、全米中

「個性重視」が、全米中

「個性重視」が、全米中

(1)



殉職警察官の遺児のための募金用カレンダーのさし絵の一つ。小学生の描いたポスターの「ドラッグ(麻薬)にノーと言おう」の文字が痛々しい

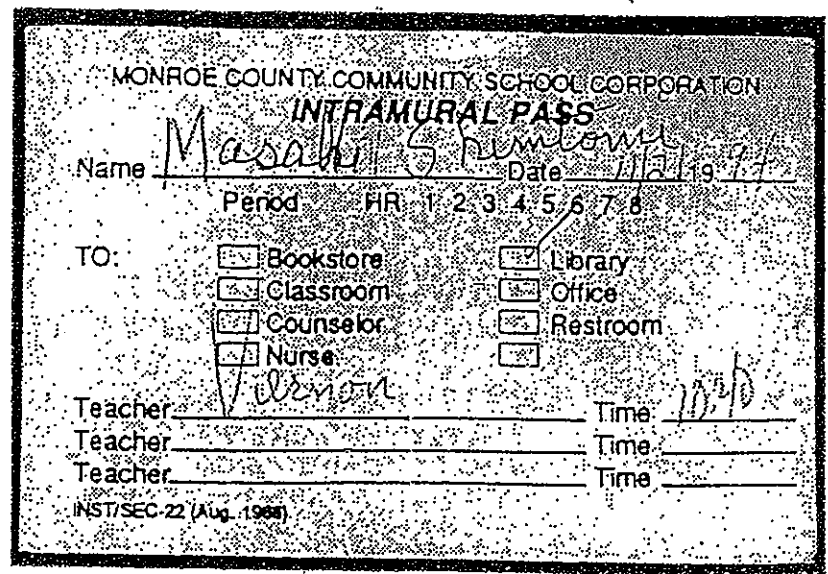
(3)



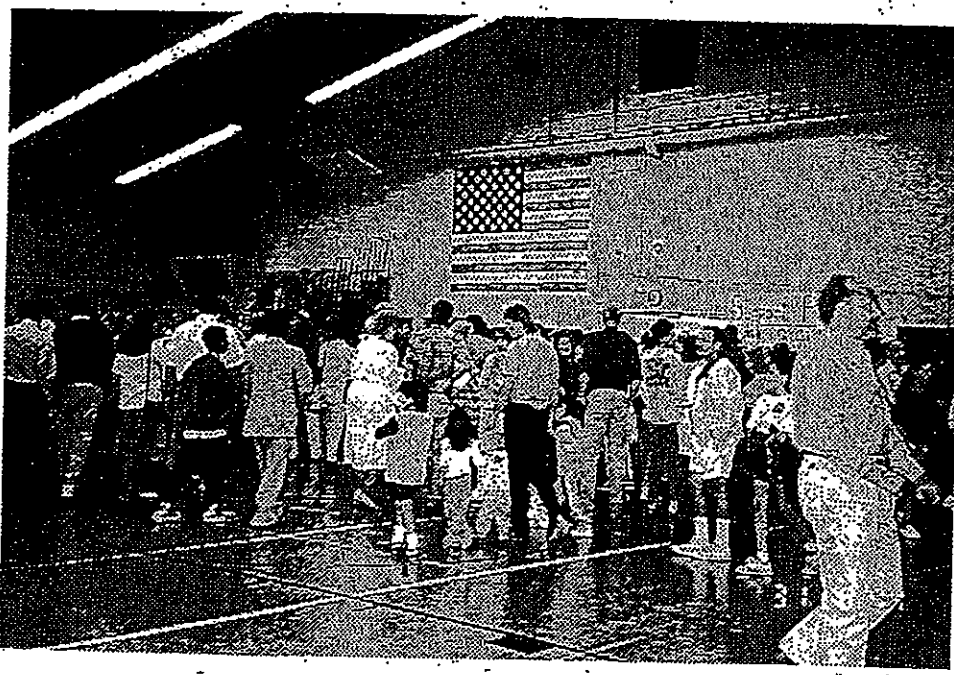
オレンジ色の上っ張りを着て、警笛やハンドマイクを片手に巡視する指導員。毎日4-5人が、ボランティアで参加している(保護者一人一役)

(5)

自己体験活動重視の国ならではのパス(校内往来許可)券。生徒は授業中でも、調査活動の必要が出たとき、担当教師からこれを持ち、図書館などに出かける



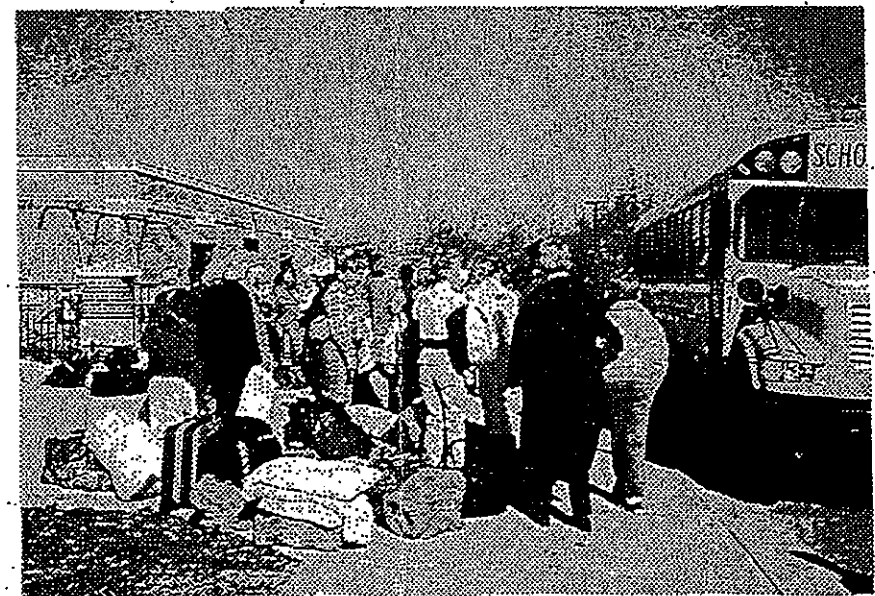
(2)



にぎわうオープンハウス。体育館での総会が終わり、各教科の説明会場に散る保護者たち。夜の集会のため家族連れが多いのも特徴

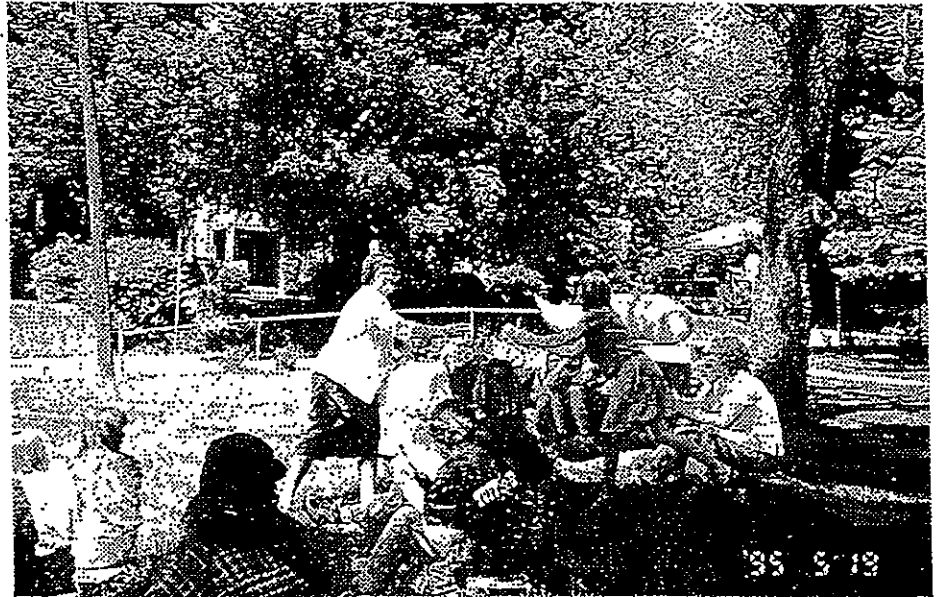
(4)

「でび子」は教師の教育活動外



小学5年生の5泊6日の宿泊研修に参加する高校生ボランティアたち。ボーイスカウト、ガールスカウトの腕前を披露するチャンスでもある。(大学進学の際、ボランティア歴は重要なポイント)

(6)



6月から夏休み。先生から子供に、使い古しのボール、天体図、バレリーナの人形などが手渡されている。野球、天文学、バレエなど、この夏トライするものへの励まし
個性とは、「チャレンジ、トライ、ガッツ(根性)」
(多様性ではなく、「やる」という主体性) - 2